

紹介医の皆様へ

「胆道閉鎖症外来」新設のお知らせ

平素より自治医科大学に患者様をご紹介頂き、誠にありがとうございます。

自治医科大学では2001年5月より肝移植を開始し、2018年12月までに292例の小児に対して生体肝移植を行ってきました。このうち胆道閉鎖症は213例(73%)を占めます。また、50例以上の自己肝温存症例をフォローアップしています。当科における胆道閉鎖症の患者数は移植に関わらず日本有数となっております。

胆道閉鎖症は乳児期に肝不全にて肝移植が必要になる症例と、幼児期～成人期に代償性～非代償性肝硬変にて肝移植が必要になる症例、自己肝を温存できる症例に分けられます。胆道閉鎖症の20年自己肝生存率は48.5%とされていますが、今後も長期生存症例が増えていくため、**成人期に肝移植が必要になる症例が増えていくことが予想され、最近では青年期～成人期症例の紹介が増えています。**また、成人期自己肝温存症例における胆道癌の合併や成人疾患の併発などが問題になっています。一方で自己肝が温存できる症例の見極めも重要であります。このように胆道閉鎖症は生涯に渡って高い専門性を持って診療を継続していく必要がありますが、多くの症例は小児施設で継続フォローされているのが現状です。小児疾患では現在トランジションが問題になっており、小児科・小児外科から消化器内科・消化器外科へのシームレスな移行が求められておりますが、青年期～成人期の胆道閉鎖症に関しても同様です。

自治医科大学では小児肝移植を開始後、2017年1月より成人肝移植を開始し、また、2019年4月より移植外科と消化器・一般外科が統合しました。これまでの小児肝移植の実績に加えて成人肝移植や肝胆膵外科を網羅することができるようになったため、どの年代の胆道閉鎖症においてもシームレスに診療できる体制が整いました。そこで今回、自治医科大学附属病院にて「胆道閉鎖症外来」を新設することと致しました。具体的には毎週月曜日14時からとちぎ子ども医療センターにて外来を行います。

紹介医の皆様におかれましては、トランジションを考えている症例や将来的な移植適応を心配する症例など、胆道閉鎖症診療に関わることでしたらなんでも結構ですので、お気軽にご連絡、ご相談頂ければと思います。

2019年9月

自治医科大学消化器一般移植外科科長 佐久間康成
成人肝移植責任者 大西康晴
小児肝移植責任者 眞田幸弘